

## 畜産現場における参加型獣医療

平塚恵子<sup>†</sup>（三重県北勢家畜保健衛生所防疫課主査）



### 1 はじめに

家畜保健衛生所は、家畜伝染病の発生予防・蔓延防止、さらに安全な畜産物供給のための衛生技術指導、動物医薬品の適正使用の指導などを業務としている。対象家畜は、牛、豚、鶏、養蜂と産業動物全般であり、疾病が発生しないよう、農場へ問題点を指摘し、改善策を指導する。しかし、中にはいくら指導しても改善がみられない農家も依然として存在する。「獣医師と家畜の間には畜主がいる」この当たり前のことに改めて気がつく。家畜の前には畜主がおり、その人を動かさなければ、疾病予防の対策など何も進まないことを痛感するのである。農家と一緒にわくわく楽しみながら、「自分の農場は今、何をすべきか」を農家自身が考えるようにできないものかと考えていたとき、出会ったのが、参加型手法であった。今回、私は、農家自身の主体性を引き出すことを目的とし、参加型手法を利用したワークショップ型講習会を養豚農家に試み、その有効性を確認したので、報告する。

### 2 参加型手法とは

参加型手法（PLA：Participatory Learning and Action、参加による学習と行動）とは、海外援助の場で用いられている手法で、住民が主体となって問題点を明らかにし、解決法も自分達で考え実行する手法である[1]。援助者は、途上国の住民を指導するのではなく、住民達自身が問題を整理し、解決する過程をサポートする役（ファシリテーター）となる。参加型手法の一つ、ワークショップは、従来の講習会のように一方的な知識の伝達によって学ぶのではなく、参加者が主体的に意見交換や体験をすることで、相互に刺激しあい学びあう方法である（図1）[2]。ワークショップには、講師が存在せず、座学ではない、決まった答えがない、頭や体を使う、交流と笑いがあるといった特徴がある。ワークショップを農家に実施する場合、獣医師は、ファシリテーターとなり、話し合いがスムーズにいくようサポートをし、農家の知識や経験を聞きだす。参加者である農家が主体であり、彼らが自分の行動内容を決定する。この手

法を使って農家に主体性を持って行動を促すことができるか、管内の農家に試みたところ、農家の主体的行動を促すことができた。以下、三つの事例を紹介する。

#### (1) 事例 1

対象：管内養豚農家、関係機関、計24名

実施内容：研修会にて、「豚のストレスと飼養環境」をテーマとした研修会を実施した。集まった養豚農家を2つのグループ（若手チーム、熟年チーム）に分け、「豚へのストレス」についてKJ法（文化人類学者の川喜田二郎氏が考案した手法で、データをカードに記入し、こ

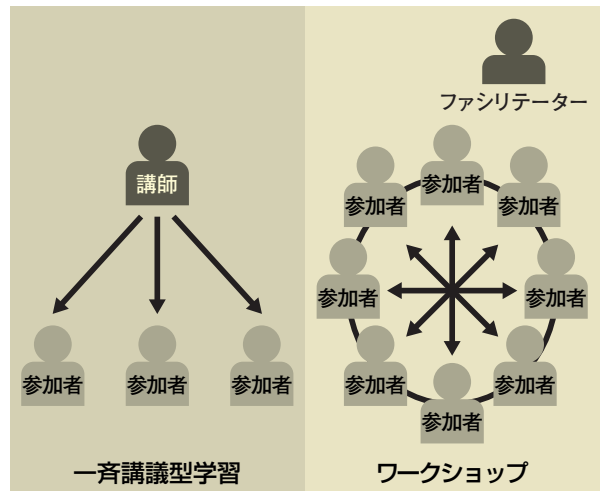


図1 従来の講義型学習とワークショップ



写真1 ワークショップ風景

<sup>†</sup> 連絡責任者：平塚恵子（三重県北勢家畜保健衛生所防疫課）

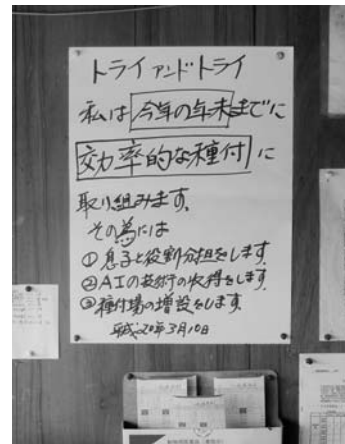


写真2 僕の1日紹介ゲーム

各自の朝起きて寝るまでの行動を書き出し、発表これでお互いの空き時間を知ることができる



ブレインストーミングで改善方法を発想しKJ法で分類、効果的な方法、取り組み易い方法を決めていく



決意シートは農場事務所に掲示

写真3 7人寄れば文殊の知恵ゲーム風景と決意シート

れをグループごとにまとめ、図解し、論文等をまとめる方法)を活用した話し合いを進めた。ストレスがない飼養方法について考え、「飼養衛生管理基準」の重要性に気づいてもらうことを狙いとしたワークショップを実施した(写真1)。最後には飼養管理上、工夫している農場例をみせ、参考にしてもらい、期限つき目標を考えてもらった。

**結果：**生産者から列挙されたストレス要因を減らす飼養管理は、飼養衛生管理基準を遵守することにつながった内容となり、飼養管理の重要性を改めて認識できた。終了後実施したアンケートの結果では、予想以上に好評で、生産者からまた違うテーマで実施して欲しいと要望もあった。研修会後は、来場者記録簿や野鳥の防御網の設置、疾病対策の強化などに取り組んだ農家もみられ、その取り組み内容を話題に、農家とのコミュニケーションにも役だった。

## (2) 事例 2

**対象：**家族経営の1養豚農家4名

**実施内容：**HACCP手法を導入している一貫経営農家で、記録が不十分な点が発生した。後継者が一人で記録をしていたため、不備が出たことが原因であった。そこで、「10年後の農場は？」をテーマとして、家族全員に、KJ法を活用し、理想の農場について意見を求め、それに近づくためのこの先10年間の実行案を出してもらった。

**結果：**理想の農場に近づくための実行案を出していく中で、作業の効率化、管理マニュアルの必要性を、後継者の妻から提案があった。そこで、今まで後継者が一人で取り組んできたHACCPの内容を話し、家族全員に記録の重要性が理解され、その後の協力を繋げた。

## (3) 事例 3

**対象：**家族経営の1養豚農家2名

**実施内容：**毎月農場巡回をし、その都度成績の検討を

しているにもかかわらず、改善が進まない状況にあった。世代交代の推進、家族全員の情報の共有化、目標を定め実行することを目的としたミーティングを飼料会社と合同で開催した。最初は、仕事の役割分担を確認するため、自分の1日の仕事を箇条書きに書いて発表してもらう「私の1日紹介ゲーム」を実施（写真2）。その1日の仕事の中で困っているところ、どうしたらいいかわからないところを発表してもらう、「ここが大変よゲーム」を実施し、参加者一同で農場の問題点を共有する。そして、その問題への解決策を、我々や飼料会社も含めた参加者全員で考える「7人寄れば文殊の知恵ゲーム」を実施し（写真3）、解決策を出し合った。最後には「決意シート」に今後の行動計画を書いてもらった（写真3）。

**結果：**普段はこちらが一方的に話すばかりだったミーティングが、今回は、農家の本音を聴くことができ、農家が何に関心を持ち、今後はどの部分を直していきたいか具体的にわかった。ワークショップ後の巡回時には、前向きな姿勢もみられ、改善の一步に繋がった。

### 3 ま と め

#### (1) ワークショップの有効性

事例1～3に共通した点は、こちらが出したテーマについて話し合う中で、全員が楽しめ、多くの意見が出、情報の共有が図れたとともに、参加者同士で刺激があり、積極性が引き出されたことである。農家自身が明確な目的をもち、改善しようと動くことで、実際に現場の改善に繋がった農家もみられた。また、複数の農家同士、一農家の家族同士、家保と農家間のコミュニケーションにも役立ち、通常の農家巡回時などでは聴けない意見を聴くことができる場になった。事例3では、農家に頻繁に訪問している飼料会社の獣医師らと合同でワークショップを実施した。立場の違いを超え、持ち寄った情報を共有し、一緒に農家と取り組みを考えることは、農家にとっても、我々にとっても問題を解決するために有効であった。

ワークショップ実施後、農家から、「こういう話し合う時間（場）がなかった」、「自分達で考える時がなかった」、特に事例2では後継者の母親から「後継者達が何を思い、どうしたいかを聴くことができよかった、ありがとう」という嬉しい言葉を頂いた。通常の作業の中で、家族や農家同士、話しているようでいて、話してないことに気づかされ、話し合う「場」を設定することがいかに重要であるかを改めて気づかされた。農場には「技術」、「人」、「仕組み」の問題がある[4]。これまで、技術に対し、我々は指導してきた。今後は、「人」、「仕組み」にも関わらなければ、生産性の向上への取り組みは難しく、農場の「仕組み作り」の改善にワークショップは有効と考えられた。また養豚分野でのワークシ

ョップは、農家数の減少や、バイオセキュリティの面で農場訪問が安易にできない現状により、情報が行き届かない面を、補う可能性があると考える。

#### (2) 「獣医コミュニケーション」の重要性

筆者が属している、全国畜産支援研究会（愛称：農場どないすんねん研究会NDK）は、2007年4月に結成された組織である。門平陸代（帯広畜産大学）を会長とし、畜産関係者や非畜産関係者（小動物獣医師、学校教師など）で構成され、生産者に主体性を持たせるために、ビジネスや海外援助、人間関係学分野で用いられているワークショップやコーチングなどの参加型手法、コミュニケーションスキルを学び、農家支援に取り入れている。NDKでは、生産現場で生産者と接する獣医師が持つべきコミュニケーション技術や考え方を「獣医コミュニケーション」と呼んでいる。堀北哲也は、動物の健康を維持・増進するには、「獣医臨床技術」と「獣医コミュニケーション」が車の両輪のごとくバランスよく駆使される必要があると述べている[3]。しかし、獣医学教育にコミュニケーショントレーニングが取り入れられ、その重要性が広く認識されているとは言えない現状である。一方で、獣医学以外の分野では、「コーチング」や「ファシリテーション」などが注目され、ビジネスや学校教育現場で使われている。三重県では、高校の教育現場でワークショップ型協同学習の実践やコーチングを実施しており、「みえコミュニケーション教育実践会」という高校教師たちの勉強会もある。筆者も勉強会に参加したが、学校現場と農場現場、立場の違いはあるが、やる気、主体性の引き出し方など共通点が多々みられた。また筆者がワークショップを実施した際、事前準備や、話し合いが盛り上がるような雰囲気作り、タイムマネジメントは、非常に重要であると痛感した。NDKの勉強会への参加が、ワークショップを実施する上で非常に役立った。こういったスキルを習得し畜産現場に応用することは、疾病の予防や生産性の向上に役立つと思われる。NDKではメーリングリストで情報交換を行っており、勉強会は、年数回、各地で実施されている。関心のある方は、以下ホームページ（または「農場どないすんねん研究」で検索）を参照願いたい。

農場どないすんねん研究会サイト：

[http://homepage2.nifty.com/ishii\\_vet\\_clinic/ndk/NDKTOP.html](http://homepage2.nifty.com/ishii_vet_clinic/ndk/NDKTOP.html)

門平研究室：

<http://www.obihiro.ac.jp/~epi-africa/com.htm>

### 4 終 わ り に

NDKの合言葉の一つに、走りながら服を着るという言葉がある。ワークショップは、「とりあえず、やって

みる」ことで、その楽しさ、面白さ、有効性がわかると  
思う。マンネリ化した日常業務の何かを、変えるチャン  
スを引き出すことができる、それがこの手法の魅力だと思  
う。皆さんにも、是非取り組んでいただき、その魅力  
をわかちあいたい。

#### 参 考 文 献

- [1] 勝間靖ら：続・入門社会開発，国際開発ジャーナル社  
(2000)
- [2] 中野民生：ワークショップ，岩波新書（2001）
- [3] 堀北哲也：臨床獣医，27，(4) 28-29（2009）
- [4] 山本浩道：だれも教えてくれなかった農場をうまくやる  
方法，Dairy Japan（2006）